Uttarajjhāyā 第34章における leśyā

土　橋　恭　秀

耆那教は，他の印度哲学諸派に比して，教義面での史的発展の跡が少なく，その意味で保守的な宗教との評を受けがちである。この評は，しかし，耆那教教義の重要な一環をなす leśyā 説に関する限り，決して正鵠を得たものではない。耆那教において leśyā とは，元来は命我（jīva）の道徳的次元を色彩によつて表出するものであつたのが，以後に業（karma）思想が受容されるに及んで，これとの関連の下に leśyā 概念の拡大・潤色が生起した，というのが既に周知の定説だからである[1)]。ところで，*Uttarajjhāyā-sutta*（Skt. *Uttarādhyayana-sūtra*, 以下略号 *Utt.*）に関し画期的な研究との世評が高い L. Alsdorf 教授の近業は[2)]，上記の説を更に的確化する上でも，驚くべき卓見と貴重な示唆とを含んでいる。古い耆那教経典の一つと目される *Utt.* は，第34章を正に leśya に充てているのであるが，原始耆那教経典の韻律および言語に関する Alsdorf 説を軸に同章を精査するとき，どのような事実が判明するかを以下に紹介乃至提示したい。

韻律の上から特に興味ある問題を提供するのは，同章の *VV.* 21–32 の範囲であつて，そこでは，どのような品位をもつた人間が，どのような leśyā を帯びるかが列挙される。その内容の詳細については省略し，また全章の構成の考察も後段に譲るが，差当たつては，上記の範囲が詩型の上から，*V.* 24 と *V.* 25 とを境にして，明瞭に前後両半に二分されることを指摘したい。すなわち，後半部 *VV.* 25–32 は，すべてが正則の śloka 詩節であるのに対し，前半部 *VV.* 21–24 は śloka 詩節としての完全とは程遠く，ここに Alsdorf 説——耆那経典の中で，śloka 詩節は古層，āryā 詩節は新層に属する——に即しての検討が必要となつて来る。

V. 21　〔a〕 paṁcāsavappavatto 〔b〕 tīhiṁ agutto chasuṃ avirao ya/
　　〔c〕 tivvārambhapariṇao 〔d〕 khuḍḍo sāhasio naro//21//

a 行（− − | ∪ − ∪ | − −），b 行（− ∪ ∪ | − − | ∪ − ∪ | ∪ ∪ − | ∪），c 行

1) Cf. W. Schubring, *The Doctrine of the Jainas* (Eng. tr.: Delhi, 1961), p. 195f.; A. L. Basham, *History and Doctrines of the Ājīvikas* (London, 1951), p. 245.

2) L. Alsdorf, *The Āryā Stanzas of the Uttarajjhāyā* (=*Abhandlungen der geistes- u. sozialwissenschaftlichen Klasse*, Jg. 1966, Nr. 2, Wiesbaden).

（－－｜－∪∪｜∪∪－）は āryā, d 行（－－－∪｜∪－∪－）のみが śloka。

V. 22 〔a〕niddhandhasapariṇāmo 〔b〕nissaṃso ajiindio/

〔c〕eyajogasamāutto 〔d〕kiṇhalesaṃ tu pariṇame //22//

a 行（－－｜∪∪∪∪｜－－）は āryā, b 行（－－－∪｜∪－∪－）, c 行（－∪－∪｜∪－－－）, d 行（－∪－－｜∪－∪－）は śloka。

VV. 23-24 〔a〕issā amarisa atavo 〔b〕avijjamāyā ahīriyā/

gehī paose ya saḍhe pamatte rasalolue//23//

sāyagavesae ya ārambhāo avirao khuḍḍo sāhassio naro/

〔c〕eyajogasamāutto 〔d〕nīlalesaṃ tu pariṇame//24//

24 の c 行（－∪－∪｜∪－－－）, d 行（－∪－－｜∪－∪－）の śloka と，23 の a 行（－－｜∪∪∪∪｜∪∪－）の āryā と，のみが明瞭であるが，23 の b 行も，次行初頭の gehī を繰込むことにより（∪－∪｜－－｜∪－∪｜－－｜－），同じく āryā と判明する[3]。但し残余——paose 以下の 23 後半と，24 前半と——には，韻律の推定，したがつてまた原文の復元，ともに全く不可能であつて，この箇所が伝承間に蒙むつた変容の特に大であつたことを物語る[4]。

さて，āryā 詩行をなす部位が後代の加筆に係ることの端的な証徴を，同じく *V.* 23 から看取することができる。すなわち，同詩節の冒頭から paose に到るまでの八語——issā（Skt. īrṣyā-: 嫉妬），amarisa（amarṣa-: 短気），atavo（a-tapas-: 苦行の欠如），avijja-（a-vidyā-: 無智），māyā（迷妄），ahīriyā（a-hrī-tā-: 無恥），gehī（gṛddhi-: 貪欲），paose（pradveṣa-: 憎悪）——が，人間の性質を表わす名詞（いずれも主格単数）であるのに対して，残余の三語——saḍhe（śaṭha-: 没義道な），pamatte（pramatta-: 粗忽な），rasalolue（°lolupa-: 美味を貪る）——は形容詞（男性主格単数）である。ところで，問題の範囲 *VV.* 21-32 を通じて見るとき，主格単数要素は名詞 naro——21d に既に現われ，24 前半末にも再出している——を修飾する形容詞であるのが当然であつて，この点で上掲の issā…paose なる八個の名詞は明瞭に異常，そして構文上の困難を生起することは言うまでもない。しかも，前項で指摘した如く，これら八語は，最後の paose を除く issā…gehī の範囲で，āryā 詩節の前半を完成するのである。つまり現行 *V.* 23 の中で，*Utt.* の

3) Alsdorf, *op. cit.*, p. 216, n. 1.

4) 強いて推測するならば，*V.* 24 の冒頭に *V.* 23 後半中の saḍhe を移すことによって，*saḍhe sāyagavesae*（∪－－∪｜∪－∪－）なる śloka 偶数行を再構し得ようか——と Alsdorf 教授は付記する。

原文に属する要素は saḍhe 以下の三語のみ（但し，それも原文の語順ではない），残余は，āryā 韻律の使用が一般化した以後の時点で，*Utt.* 当該部位の構文を顧慮することもなく，他の（*Utt.* 以後の経典に属する）āryā 詩節から引写し挿入されたものであろう。——*VV.* 21–22 中の āryā 詩行に対しても，同様の由来を想像して不自然ではなく，そして，このような挿入に伴なう改竄の極まつた場合が，もはや現形から韻律推定すらも不可能な *V.* 23 後半——*V.* 24 前半の範囲，と考えて差支えあるまい。

以上は Alsdorf 教授の所説を筆者の理解に従つて紹介したまでであるが，ここで，筆者が予め本章の初頭において指摘した *VV.* 21–24 対 *VV.* 25–32 の区分に，更めて別の検討を試みたい。既述の如き改竄の形跡をはらむ前半部四詩節に対し，後半部八詩節は完全な śloka で，本来の形態を保持しているものと想察されるが，両者の対蹠を Alsdorf 教授は，その点以上には注目されぬ様子である。ところが，外ならぬ教授自身が著書 *Les études jaina* の内に示される，耆那教原始経典の言語についての明快な見解を[5]，外ならぬ只今の場合に適用することから，極めて興味ある事実が明るみに出るであろう。

白衣派耆那教経典の言語が Ardhamāgadhī と呼ばれる Prakrit であることは周知の所であるが，Alsdorf 教授によれば，この汎教団言語が展開成立する中核的源泉として，「半マガダ語」の称が文字通りに妥当するが如き言語が存在したのであり，そして，これこそが耆那教原始経典に本来の言語に外ならぬのである。すなわち，Magadhism の名で知られる言語特徴のうち，三種の擦音の ś への統一とか，r/l 両流音の l への統一とかについては任意である反面，Skt. as への対応としては，Prakrit 諸方言に一般的な o 扱いとは対蹠的に，あくまでも Magadhism e をもつて一貫するのが，原始経典の言語——勝義における *ardha-māgadhī*「半マガダ」語——の基本性格であつたと Alsdorf 教授は見るのである。

ところで，問題の範囲 *VV.* 21–32 について，語末 -as を代表する -o と -e との出現頻度を調べると，次表の如き結果が得られる——

VV.	21	22	23	24	25	26	27	28	39	30	31	32
-o	7	4	1	6	0	1	0	1	0	1	0	1
-e	0	0	4	1	6	1	4	3	4	2	4	3

5) L. Alsdorf, *Les études jaina* (Paris, 1965), pp. 21–23.

後半部 (*VV.* 25–32) が,事実上 -e 扱いに一貫していることを,先ず指摘したい。確かに,その間でも偶数番号詩節には,それぞれ一回 -o の出現が数えられはする。しかし,これらは,前半部の中 (*VV.* 22, 24) で既に現われた定句が反覆使用されるものに過ぎず,後半部に元来固有のものであつたとは考えられないからである。かくて,後半部の主体は,勝義における *ardha-māgadhī* 語で書かれていると確言できるのに対して,前半部では,勝義 *ardha-māgadhī* に特徴的な -e は少数事例に止まり,逆に汎 Prakrit 的 -o が遙かに数多く頻出する。

このようにして,耆那教原始経典の韻律・言語それぞれに関する Alsdorf 説は,それぞれに即して *VV.* 21–32 の範囲を検討するとき,その都度,*VV.* 21–24 と *VV.* 25–32 との間の対蹠的な差違という,同一の結果に導くことが判明した。この事実は,韻律・言語のいずれの論点でも Alsdorf 説の可信性を高める所以であり,かつ同時に,筆者にとつて以下の結論を必至とせずにはおかない:——勝義 *ardha-māgadhī* 語による śloka 韻文という耆那教原始経典 *Utt.* 原形は,*VV.* 25–32 においては高い程度に保持されて来ているが,*VV.* 21–24 では,より後期の製作に係る汎 Prakrit 的言語の āryā 詩行が,過半を占めるまでに混入されており,*Utt.* 本来の要素は少量かつ不完全な形でしか含まれていない。

leśyā 論に充てられる *Utt.* 第34章の全体を通じて,śloka 詩節と āryā 詩節との分布は以下の如くである(上に見たように,*VV.* 21–24 は両韻律の混交する詩節であるが,それらの基底に śloka 要素があったと見られる点から,一応 śloka 詩節の数に算することとする):——

śloka : 1「緒言」; 3 "nāma" (名称); 4–9 "vaṇṇa" (Skt. varṇa: 色彩的様態); 21–32 "lakkhaṇa" (lakṣaṇa: 特徴措定); 56–57 "gaï" (gati: 帰趨); 61「結語」。

āryā : 2 "dāragāhā" (dvāragāthā: 目次); 10–15 "rasa" (味覚的様態), 16–17 "gandha" (嗅覚的様態), 18–19 "phāsa" (sparśa: 触感的様態); 20 "pariṇāma" (展開), 33 "ṭhāṇa" (sthāna: 場), 34–55 "ṭhiï" (sthiti: 持続), 58–60 "āü" (āyus: 寿命)。

さて,śloka 詩節の内容を順次に辿るならば——章の主題が leśyā である旨の宣言 (*V.* 1) に続いて,leśyā が黒・青・灰・赤・蒲黄・白の六色の名で表わされることを説き (*V.* 3),更にこのように命名される leśyā の個々につき,当該色彩を呈する身辺の具体的事物を例示 (*VV.* 4–9) したのち,どのような性質の人間がいずれの leśyā を帯びるか (*VV.* 21–32)[6],また leśyā の良否が人の境遇の良否を左右すること (*VV.* 56–57) を教え,最後に,leśyā に関する明識を具眼

の士に要望する（*V*. 61）。——現世的な日常倫理に連なる素朴な論旨が，一貫して感得されるのではなかろうか。

これに対して āryā 詩節の方は，いずれもが何らかの意味で二次的性格を思わせる：——本章が取扱う項目（上掲“ ”内の名辞がそれである）の列挙から成る *V*. 2 は，この章の詩節すべてが出来上つた以後に作成・挿入されたものであろう。——元来は，*VV*. 3–9（śloka）に見えるが如く，色彩的に構想されたにちがいない leśyā の性格を，香・味・触の次元に拡大しようとする作為が，*VV*. 10–19 に看取されはしまいか。掲げられる事例が，しばしば具体的な的確性に欠ける点からも，この印象を強くせざるを得ない。——*VV*. 20, 33–55, 58–60 は，人生の現実との関連は稀薄なまま，ひたすら好んで数を弄ぶ種類の煩瑣論議であつて，正に業論の影響下に起つたであろう leśyā 説の思弁化を指向するものである。

かくて Alsdorf 教授は，*Utt*. 第34章のうち śloka 部分のみが本来の leśyā 説を代表するものであり，leśyā とは本来，「心的色彩」——「（個々の）命我の（帯びる）色彩」——に外ならぬと断言し[7]，更に，このような本来の leśyā 概念を，耆那教は Ājīvika その他の異教の教義から借用しつつ，後にはこれを自らの業論展開に即応して潤色・発展させることとなつた，と説かれるのである。異論の余地なく正当な見解と信ぜられるが，補足的に二三の私見を提示したい。

耆那教の leśyā に対応するものとして，確かに Ājīvika には abhijāti という概念があつた。それは黒・青・赤・萠黄・白・純白の六色に分類され，それぞれが特定の社会的身分に措定されるのであつて，語の字義の如き「血統，種姓」を色彩的に構想したものに外ならない[8]。両概念の間に，（abhijāti の純白色に対し leśyā の灰色，という一色に関する相違を除き）六色分類の一致は明白であるが[9]，それに加えて，abhijāti が現世の人間社会に関わるものであるのと全く同様に，本来の leśyā も，前掲の śloka 詩節要約から明らかなように，あくまで現実の人生に直結する概念であつた点を強調したい。すなわち，Alsdorf 教授が leśyā を「命我の色彩」と規定されるとき，命我は人間のそれに限ることの指摘が，当然あるべきかと思われるのである[10]。事実，*Utt*. の本章を通じて，人間以外の命我も leśyā を持つと思わせる種の言句は，āryā に成る *VV*. 34–55 にしか現わ

6）本稿初頭の *VV*. 21–24 テクスト，就中 22cd, 24cd に反覆される定句，を参照。

7）Alsdorf, *Āryā Stanzas*, p. 214（*ubi alia*）; cf. Schubring, *op. cit.*, p. 194.

8）Cf. Basham, *op. cit.*, p. 243. 例えば，黒の abhijāti に数えられるのは，狩人・漁夫・盗賊・獄吏などである。

れない[11]。

ところで，abhijāti と本来の leśyā とが，人間の品格を色彩的にとらえる点で等しいとしても，その品位の様相において微妙な差違を否定し得まい。abhijāti においては，出生によつて多分に決定される社会的身分が問題であるのに対して，leśyā では，個人の後天的徳性がもたらす品位の感を強くする。既成の身分差を単に図式化するのと，倫理的価値観をもつて個人を等級づけるのとでは，前者に発生上の先行段階を認めるのが当然であろうから，借用関係は Ājīvika の abhijāti から耆那教の leśyā へであつたことは，先ず確実と見てよいであろう。そして，正にこの点に，leśyā という名称の字義を推測する手懸りがありはしまいか。

問題の語に leśa-（細片，微粒子）からの二次派生語幹 leśya- を認める Schubring 説は，それ自体として全く妥当と信ぜられる[12]。ただし，その際に leśyā なる女性形を如何に説明すべきであろうか。筆者はこれを，起源において *leśyā [abhijātiḥ]*「微粒子（に属する）品位」の略称ではなかつたか，と推測したいのである。すなわち，Ājīvika から abhijāti の概念を借用しつつ，耆那教はこれに，いうなれば染色体的な肉体組成要素——徳性に伴なつて色彩を転ずる，あくまで物質的なもの——を構想したのではなかろうか。もしそうであつたとすれば，耆那教の業概念が物質的な性格を特徴とするだけに，同じく物質的様相を帯びて先立しあつた leśyā 概念には，これと密に結びつけられて思弁的彫琢を蒙むる必然性があつた——との立論も可能になるかと思われるのである。

---

9) 色彩の名称も原語（abhijāti については巴利，leśyā は AMg.）では若干の相違がある。

abhijāti: kaṇha (Skt. kṛṣṇa: 黒), nīla (青), lohita (赤), halidda (haridra: 蒲黄), sukka (śukla: 白), paramasukka (純白)。

leśyā: kiṇha (kṛṣṇa: 黒), nīla (青), kāū (kāpota: 灰色), teū (taijasa: 赤), paṁha (pādma: 蒲黄), sukka (白)。

10) この点では，H. v. Glasenapp, *The Doctrine of Karman* (Eng. tr.: Bombay, 1942), p. 48f. の所説，および Basham, *op. cit.*, p. 245 の記述は，更に大幅の修正を要するものと私考する。

11) そこでは，neraïya (Sks. nāraka: 奈落住者), tiriya (tiryac-: 畜生), nara (人), deva (神) が取扱われ，なお五官動物の範囲に限られている。命我すべてが leśyā を持つとされるのは，*Paṇṇavaṇā-sutta* (Ed. Puṇyavijaya: Bombay, 1969) 第17章をもつて嚆矢とする。

12) Schubring, *op. cit.*, p. 195 — n. 3 に紹介される他の語源解釈は，本稿の考慮外とする。